

## 友 情

松 田 壽 孝

大正十二年の春は、輝かしくめぐつて來た。青春の礎を後にして故郷Eを去つて、冬雄は東京の文科に、繁は工科に、哲三は北海の農大にはいつた。冬雄と繁は府下の一隅に在る二階家の素人下宿から、市内のH高臺に聳ゆる學舎に通學した。朝早く起きて揚子を使ひ武藏野一帶にかゝる朝霧を眺めるのは、何ともいひやうのない爽やかな心持がした。

土曜日の午後など二人はよく寮歌や讚美歌を合唱した。

『哲三の奴、今頃は何をしてゐるかな、』

二人はよく哲三の噂をしては、故郷E町の自然を追想した。E町の海岸線に沿ふて遙か遠くまで連續して見渡される、たつぷりと雪のかゝつたアルプスの山々、雄大な砂丘の群など、夕曉の空を背景にして眼の前に浮ぶのであつた。

繁は時折巢鴨の叔父を訪れた。冬雄も一度彼と一緒に、彼の叔父といふ人の家に遊びに行つた事もある。叔父はその日は留守であつたけれども、叔母は家に居た。彼女は優しい上品な至つて賑やかな性質の持主だつた。そうして繁と同様に、氣持よくもてなしてくれたのが、生れつき殊更淋しい性の冬雄には何よりも嬉しく思はれた。

こんなことで空虚は一日々々と埋められて行くやうに思はれた。冬雄は圓滿なものに憧れた。美しきそして又冷やかな大理石の世界に光を求めて、磨いた玉のやうな人間になりたい、地藏様のやうな満足な容貌が、欲しいと思ふ事もあつた。併し時とするに、慈悲の念が滔々と押し寄せて來て、醜い自分の性情を省みて、散々に苦しめられた。自分といふものが餘りに少さく見えてしやうがなかつた。希望もなく、憧れもなくすつかり凋んでしまふ事などもあつた。そんな時は、彼は自然に考へさせられた。

『俺は淋しい——俺の未來は暗い——果て知れない平原に行き暮れた旅人の持つ心のやうに、そこには光明はない——いや俺には未來も何もありはせぬ、もうとうに死んで腐つてゐるではないか！一日でもよいから自分を尊い者に思ふ日があつてほしい』

と思ふ事もたび／＼であつた。こうした時、自分の此の淋しい暗い氣持を慰めて呉れ、勵まして呉

れるものは清い友情であつた、唯一人の友繁の友情だつた。

『また君、考へてゐるのか、いゝ加減に悲觀はよさうぢやないか、永遠に清くまじめに生きて行かうぢやないか、そうすれば僕等は何時まで純な友情を楽しむ事が出来るんだからね、お互に余り自分の運命から逃れやうとして焦つては駄目だよ、焦れば焦る程苦しむばかりだからね、與へられた運命の下にあつて暗澹とした人の世の相を、ぢつと見つめようぢやないか、悲しみの中に在つて、自己を深く堀り下げて行かうぢやないか、君がそうして考へる時、俺も亦たまらなく考へさせられるよ、しみぐと考へさせられるよ、併し僕は悲哀の中に浸つてゐる時に、眞實の自己を自覺するやうな氣がするよ、淺はかな快活は止めて悲哀の奥にこもる盡きない喜びも、悲しみも、お互に分ち合つて慰め合つて行かうぢやないか』

『有難う！君の言葉には何時も僕は泣かされ感謝をしてゐるよ、誰であつたか名前は忘れたが「友無ければ此世は荒野なり」とか言つたあの言葉の意味がしみぐわかるよ』

と何時とは知れず感傷的な彼の手と繁の手とが、堅くく結び合されてゐた。

實際繁の此の言葉はどんなにか冬雄の心を慰め、どれだけ努力づけて呉れ又やゝもすると偏屈になる心から遠ざけて呉れたかわからなかつた。

郊外の自然はやさしい春の雨に恵まれて樹木はしつとりと緑に潤ひ、水々しい若葉の色は冷靜と情熱の程よい調和を示してゐた。そんな雨の晩等二人はよく郊外にふさわしいやうな蛙の聲を聞き乍ら夜更けまで語つた。こふした折二人はどんなに幸福であつたかわからなかつた。

『俺は孤獨だ……俺は淋しい……俺は荒磯に一本流れ寄つた流木ではない、併しその流木よりも俺は孤獨だ……俺は一ひら風に散つて行く枯葉ではない、併し俺はその枯葉よりもうら淋しい、併し淋しい者は何時も幸福だ……』

と冬雄はつく／＼そう思ふのだつた。

或土曜日の午后——夕方からしよ／＼音もなく細かな雨が降り出してゐた。冬雄はこんな細かな絹糸のやうな雨が何よりも好きであつた。餘り心が／＼しかつたので、そゝのかされるやうに二人は傘もささず外に出た。何處といつて目當のない二人は足の向くまゝに染井橋の方に歩いて行つた。彼等は喜びの心で一ぱいになり、話に夢中になつて歩いてゐた。染井橋を右に折れて何時の間にか二人は墓地の中を歩いてゐた。

『そこは沈黙の世界だ……寂寥と無限の神秘の世界だ……冷靜と反省の世界だ……』

と冬雄は思つた。そこに行く何人にも無限の眞理を表示してゐるかのやうな苦むせる墓標の上にも、

此の細な雨が絶えず降つてゐた。冬雄は時折歩を止めて考へた。寒苦鳥の如き生活にその日／＼を過す人間は誰であらうと、いつとは知れずこうした唯一個の墓標となるのではないか、そうしてその冷い土の下から初めて眞の我に反つて此の地上の人々に何ものかを呼びかけてゐるのではないか、そうしてそれ等の人々の誰にも聞える筈のない小さな聲で唄ふ歌が、その暗い地の底にきゝ入る時、冬雄の耳に微かに聞えて来るやうな氣がしてならなかつた。又しよんぼりと濡れた赤い信女が怪しい居士の膝に凭れかゝつた儘、寢てゐる姿も何となくおかしいやうに感ぜられた。時折丘の向ふを省電の走る響が聞かれ、遠き市内の紅い仁丹の燈がチラホラと雨の中にまたゝくのが眺められたりした。二人が家に歸つたのはもう夜であつた、天井の煤けた中に電燈がたつた一つ雑然とした部屋の中を照らしてゐた。それから又遅くまで彼等は語つた。冬雄にはその日一日は永い／＼月日にも優つて尊く感ぜられた。

## 五月△△日

過去は満されない、現在は焦燥に苦しめられる、俺は明るい世界に住み、暗黒と闘ひ、光を求めて進む生甲斐のある生活を見出し得たい、羊かんを食ふ友達俺は俺は要らない、唯一緒に散歩する位の友達もまた、おれは必要としない……………。

五月△△日

お互に信じ合つて行きたい、友情によつて俺はそこに此の世の何ものも融合し得ない、無上の樂園を拓いて行きたい、魂と魂との抱擁……胸と胸との共鳴……互に光であり、慰めでありたい……。

こんな事はその頃の冬雄の日記の斷片であつた。夏休みを前に控えてふとした事から繁は病氣になつた。そうして故郷E町に静養の爲歸つた。彼が歸つてから冬雄は暫く彼のその後の病狀を氣遣ひながら、相變らずより一層淋しい氣持で學舎に通つた。日夜繁の安否を氣遣つてゐた彼は何度となく繁の夢を見た。こんなのもあつた。

廣い校庭の隅から黒い着物を着た繁が出て來た彼は大きな聲で『繁君！繁君！』と二度程呼んだ。繁は此方を振り反つて『聲が大き過ぎる……』と彼は闇の中に消へて行つた。

冬雄は此の夢が一番氣になつて仕方がなかつた。聲が大き過ぎると云つた此の繁の言葉は、何だか不吉の暗示でもあるかのやうに思はれてならなかつた。彼が歸つてからは一週間目の朝彼の妹から便があつた。

『兄の事に就いてはいろ／＼と御心配有難う御座います一昨々日までは體溫も左程御座いませんでしたのに今朝は大分熱もあるやうで御座います、けれど只今は餘程熱も退けたんで御座いませうが

時折枕邊に居りますと貴方の事等私に語つては兄は淋しい笑を見せたりして居ります……。」

此の手紙を見た冬雄はその日の晚上野から米原行の急行に乗つた。そうしていろ／＼の彼の様子を想像し乍ら車中少しも眠れなかつた。冬雄の心配を乗せた汽車は唯惜しげもなく闇の中をE驛を目指して走つてゐた。